

スキーにて受傷した腓骨筋腱脱臼に対する治療経験

○篠原 靖司¹⁾, 熊井 司¹⁾, 笠次 良爾¹⁾, 高倉 義典¹⁾, 田北 武彦²⁾

¹⁾ 奈良県立医科大学 整形外科

²⁾ 田北病院 整形外科

【はじめに】

スキーは様々なレベルで楽しめるウィンタースポーツの代表であるが、その競技、装備の特性から受傷する疾患も特徴的であり、腓骨筋腱脱臼もその一つである。今回はスキーにて受傷した腓骨筋腱脱臼の治療を経験したので報告する。

【症 例】

19歳男性、スキーの競技会中に転倒し受傷、左足関節の疼痛と腫脹のため来院。外果後方に軽度の腫脹と圧痛および腓骨筋腱の脱臼の再現性を認めた。画像検査で骨傷は認めなかった。早期のスポーツ復帰を希望されたため手術的治療を行った。外果後縁を切開すると上腓骨筋支帯が剥離した仮性嚢を認め、嚢内に長腓骨筋腱が脱臼することを確認した。仮性嚢を切開し、骨性制動と軟性支持再建を行った。術後はギプス固定を4週行い、6週から徐々に運動を許可した。現在経過は良好、今シーズンのスキー復帰が可能となった。

【考察および結論】

腓骨筋腱は構造と走行から足関節の動きに対して大きなストレスを受けているが、腓骨の形状による骨性支持と軟部組織による支持で安定性が得られている。これらが破綻することで腓骨筋腱脱臼が発生するが、その発生機序には足関節の肢位が重要である。特にスキーはブーツにより足関節が固定されることと、滑走時の姿勢により足関節の背屈、外がえしが強制されており腓骨筋腱脱臼発生の肢位と同様であると考えられる。本症例は競技レベルのスキーヤーで強固な安定性を得るために骨性制動と軟性支持再建を行い短期ではあるが良好な結果が得られた。